

序

東日本大震災から3年をむかえました。私ごとになりますが、昨年の春被災地を巡り、「復興」のあまりの遅さに唖然といたしました。その状況は、1年経っても大きく改善はされていないようです。また、報道されることがどんどん少なくなりつつありますが、福島原発事故のその後の状況も収拾とは程遠い状況にあります。さらに、我が国の内外の状況も、近隣諸国との関係も含め、不安定さを増しつつあるようです。未来を担う若者たちへの教育のあるべき姿について、政治主導などではなく、教育に関わるすべての人たちが真剣に議論を深める必要性がより高まっていると思われまます。

本校は国立大学法人筑波大学の附属学校の一つとして、附属学校の中期目標として掲げられた「先導的教育拠点」「教師教育拠点」「国際教育拠点」の3つをキーワードとして、種々の取り組みを行っております。附属学校としての大学との連携強化の継続はもちろんのこと、本校OBや筑波大学教員による社会貢献プロジェクト「筑駒アカデミア」も2007年より継続して開催し、一般向けの講演会と本校生徒による地域小学生向けワークショップなどで、地域貢献にも積極的に取り組んでまいりました。「教員免許状更新講習」においても、幅広い講座を開講するとともに、「附属学校実践演習」による公開授業を毎年開催し、受講者の方々から高い評価をいただいております。

また、本校は2002年以来、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）に指定されており、2012年度からは「豊かな教養と探究心あふれるグローバル・サイエンティスト(global scientist)を育成する中高大院連携プログラムの研究開発」と題した3期目のSSH事業（5年計画）を開始いたしました。さらに、筑波大学の特別プロジェクトとして「トップリーダー育成のための教育の高度情報化事業－図書・情報メディアの利用を進化させた高大連携と国際交流－」も2012年度から（3年計画）でスタートしております。

このように、様々な新しいプロジェクトにも取り組んでおり、教育のICT化に向けた検討・研究も行っております。そのような中で、いかにICT化が進んだとしましても、教師と生徒、生徒と生徒との、人と人との関わりを重視した教育が、これまで通り、いやこれまで以上に重要になるであろうと感じております。

本論集は、本校における日常的な教育研究・教育実践の成果を教科別にまとめたものです。この論集に記載の内容が、関係各位の教育活動のご参考に少しでもなるならば幸いに存じます。

本校及び関係各位の教育実践のより一層の充実をはかるため、本論集への忌憚のないご意見、ご批判、ご提言を賜りますようお願い申し上げます。

2014年3月

筑波大学附属駒場中・高等学校

校長 星野 貴行